演題番号10

最重度認知症患者の視覚運動課題の学習過程とプロフィール

○平井 達也[1] 若月 勇輝[2] 岩谷 竜樹[3] 石原 明彦[4] 石川 康伸[5] 木佐貫 昌哉[2] 金尾 和浩[2]

1) 名春中央病院
2) 川島病院
3) 老人保健施設みず里
4) ウェルネス守山
5) 西尾病院

【はじめに】

アルツハイマー病（AD）はリハビリテーションの阻害因子（目黒, 2012）と考えられている一方，運動学習が可能であることも示されている（IADA van Halteren-van Tilborg, 2007）．しかし，ADを有する高齢患者のより詳細で縦断的な学習過程は示されていない．本報告では，重度のAD高齢患者の視覚運動課題の学習過程を検討し，認知症患者に対する学習可能性（外的，内的要素）について議論することを目的とする．

【方法】

対象は90歳，女性，HDS-R4点であった．対象者にマウスを内蔵したデバイスを片側足部に取り付け，PC画面に黒線で表示された直径5cmの円を「始」の位置から「終」までポインタでなぞるように指示した．「始」から「終」までの運動時間（MT：秒）とポインタ軌跡が目標線から逸脱した面積（EA：pixels）を算出した．課題は1日5試行，5日間行った．

【運動学習の結果】

5日間で，MTは顕著に減少（41.7→17.1秒)し，EAは大きな変動はなかった（214195→189594 pixels）．各日の5試行の経過を見るとMTは，変動が大きいが，5日間のうち4日は1試行目より5試行目の方が減少した．EAは，軽微な減少傾向を示した．

【プロフィール】

注意：課題中，ポインタの動きを常に追視し，課題以外の外的な刺激に注意が捕捉されなかった．イメージ（に基づく学習予測）：前日と比較したこれから行う試行成績の予測ができなかった．言語：失敗に対し客観的な表現や情動的な表現が自発的に表出した．その他：通常の会話は適切に成立するが短期記憶は低下した．合目的的な行動が自発的に出現した．失行症状はなく，道具を適切に使用した．

【考察】

従来の研究で，対象とされていなかった超高齢の最重度認知症でも運動技能が向上する可能性が示され，認知症患者に対する学習可能性に関する外的要素として暗示的（implicit）な課題が有効であることが示唆された．課題結果およびプロフィールから，重度認知症高齢者の学習可能性の内的要素として，失行症状の有無，課題への注意の集中もしくは外部刺激への注意の捕捉の状態や失敗への反応が重要かもしれない．

【倫理的配慮（説明と同意）】

所属法人に研究について承諾を得るとともに，本人および代諾者に同意を得た．